

看護衣の被服構成学的研究（第1報）

高橋 房子

緒 言

働き着は、各人の働く目的、職種によって異なり、それによって仕事の能率をはかっているが、1日の大半をこの働き着によって過ごすには余りにも、お粗末なものもあり、いまだに与えられたまま、何となく着用しているといった傾向が強いようである。

著者の看護衣に対する研究は、10年前から始められ、1956年、1960年には、それぞれ機能的デザインの働き着ショーが行なわれた際に、そのデザインを発表した。

この小論では、働き着の一つとして看護衣を取り上げ、これに関し1956年、1960年および1966年の3回にわたって調査した資料を基礎として、将来の看護衣のあるべき姿について考察する。

I 看護衣の歴史的展望

わが国の女性洋装史の中で最も古いと言われているのが看護衣である。そこで1886年創立のN病院の看護衣にふれてみると、第1図に示しているごとくである。すなわち、1886年当時のものは、鹿鳴館時代の洋装の感化か、ドレス丈の長いこと、そして、ふくれた袖山、引き締まったスタンド・カラーの衿元、それに皇室の菊の紋章を模して、16の罫がとってある寒冷紗で大きく張りをもたせて作った帽子が特徴と言え

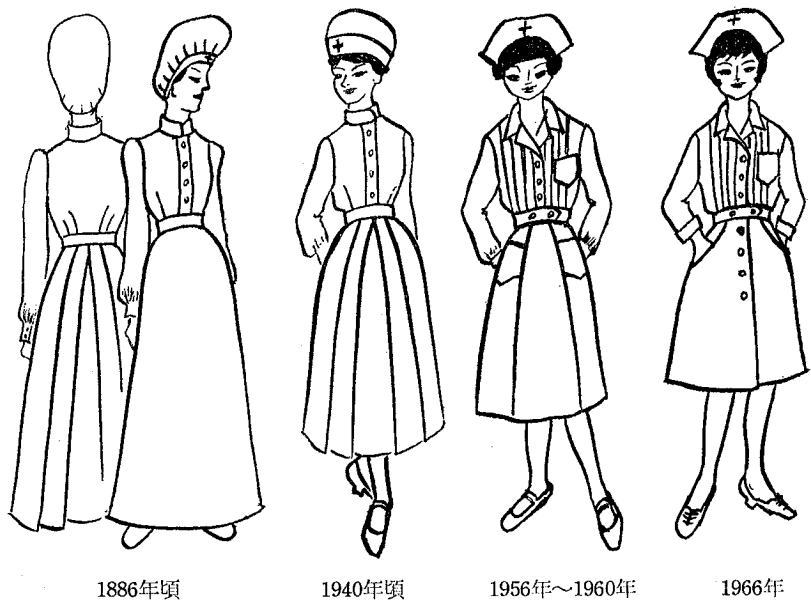
る。現代は新しい繊維が出廻り、着捨てを叫ぶ時代が来たわけだが、この時代にも、すでにこの帽子はかぶり捨てていたということである。

イヴニング・ドレス丈からカクテル・ドレス丈へと変ったような1940年ごろの看護衣では、しょうちゃん帽と呼ばれるような丸帽になり、戦時体制の活動的なものになった。

これらの看護衣には常に清潔を保つということが必要とされ、たとえば婦長級では、一度腰かけてしわになった看護衣は、すぐ着換え付添いの看護婦がいてすぐアイロンをかけるといったぐあいには、日々幾度も着換えて、常にしわ一つない看護衣を着用していたとのことである。現代のように、手近に楽な糊があるわけではなく、糊付けの工夫、つまり、糊の濃度は各自がその都度研究し、糊付けした清潔なものを身にまとったのはよかったが、いつしか糊付け過剰になり、糊付けによる騒音が問題化された時代でもあった。重傷病室を廻るには、歩くたびの騒音が妙に患者の神経をとがらせたようだ。

戦後（1945年以後）アメリカの影響から、現在の帽子に変わりテラー・カラーの看護衣となっている。これらの看護衣からも時代の流れがくみとれ、被服構成学的にみても興味あるものである。

〔注〕 1) 当時の看護衣の模型および時代を迫った写真などからまとめた。



第1図 N 病院の看護衣の変遷(写真によりまとめる)

II 1956年の調査調査

調査対象および調査方法

広島市を中心とする総合病院と特殊病院の5カ所を見学し、看護婦長ならびに各科の主任級の看護婦より聴取した。

調査内容

・職場の調査

職場環境、看護婦数、平均年齢、食事場所、仕事の種類とその内容

・作業の調査

労働内容、作業状態、労働環境

・看護衣の調査

給与状態、現在の看護衣についての問題点(デザイン上、裁断上、縫製上)

結果および考察

看護衣については、看護婦の伝統的な誇り——白衣の天使——からくるかなり強い愛着もあり、これを改良してゆくことには、他の働き着とは違った困難さを伴うものであることもわかったのであるが、調査の結果を総括して述べると次のとおりである。

看護婦の年齢は、婦長級の中年ないし初老の人たちから、看護婦になったばかりのハイティーンの人たちに至る大きな開きがみられる。これらの人たちは、通勤か寄宿舍生活のいずれかにより勤務しているが、院内における更衣室ないし更衣場所のごときは、一応どの病院においても与えられているようであった。

第1表 労働(作業)の状況

労働内容	作業状態					休憩時間	休憩施設有無
	時間	立つ(%)	坐る	動く(%)	度合		
診療の介助と 病室看護	三交替制 8.00~16.00 16.00~24.00 0.00~8.00	50% 60%	記録する時のみ	50% 40%	中等度	摂食時間のみ (時差をつけて) 交替	職員食堂の他に 特になし

看護婦の労働状況を示すと第1表のごとくである。一般に、その勤務は外来と病棟に分かれ、さらに各科別があるが、その内容は、主と

して診療の介助と病室患者看護であって、三交替制8時間の基準看護にしがっているものが大部分であり、中等度の労働である²⁾。

第2表 労働(作業)の環境

採光	温度	調温設備の有無	通風	スペース	音響
普通	普通	冬期に暖房あり冷 暖房のある所は少 数	普通	広い	普通

労働環境は第2表のごとく、近代的設備のある病院では他の職場に比べむしろ快適なものであり、一般にも問題は少ない。しかし、病院は患者を扱うところであり、清潔保持、感染防止

について留意するとともに、患者、看護婦間などの精神的な諸問題についても、注意を払うべき環境であることが認められた。

問題の看護衣に関しては、第3表および第4

第3表 看護衣の給与状態

給与の有無	方法	数量	サイズ	予算	期間	損傷措置	備考
有	貸与	3枚	特大、大、中一 部では、各自の 寸法をとる。	¥600 ¥800~ 1,200	3年に1度位 損傷するまで	各自	一部では、靴 下・靴が給与 される。

第4表 看護衣

構造上の問題							
衿	袖	ウエスト	身幅	裾回り	ポケット	留具	着脱
テラー カラー	長袖 または 短袖	びったり または ルーズ	普通 ないし 広め	160cm ~ 190cm	両腰に叩きつ けかあるいは 切替利用はさ み込み	ボタン スナップ	前開き または ヒップライ ンまで
形	色	布地	洗濯の回数	誰がするか			
ワンピース式	白	ブロード あるいは 晒した天竺	2日に1回 3回	病院・各自 または クリーニング			

表に示されるごときが一般の実態である。看護衣は、すべての病院において制服として貸与されていたけれども、最初2着~3着与えられてからは、その破損程度により替えられるのがほとんどで、1年に1着ずつ給与される病院は1カ所のみであった。看護衣のための予算も1人当り年600円程度の少額であった。また、新調に当たってのサイズも、各自の採寸により仕立てる病院は1カ所、他に特大・大・中・小の規定サイズを仮縫して合わせるところが1カ所あ

たが、ほとんどの病院では規定サイズのもをそのまま当てがわれていた。

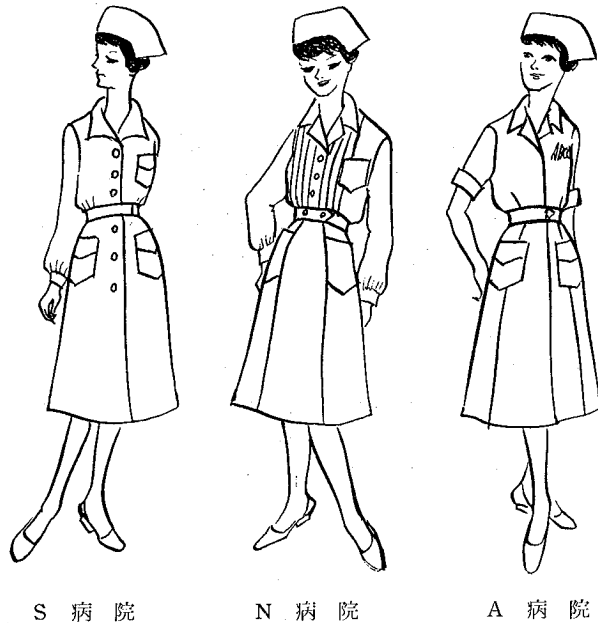
看護衣自体は、表のごとくワンピース形式で純白のものである。一般に、白についての愛着は強く、希望としても圧倒的多数であった。布地は、天竺、ブロード、キャラコで木綿が全部を占めている。袖は完全暖房の施されている1カ所のみが短袖であり、他はすべて長袖であったが、7~8分袖で、袖つけは運動量を増し、ゆったりとしたものであってほしいという希望

〔注〕 2) 手術場は特殊なものであるため除外した。また、汚染の危懼される仕事をする場合には、予防衣が使用されているが、これは一応対象外とした。

だった。衿は、テラー・カラーが大部分である。ポケットは大き目なものを両サイドに。前留は、ボタン留であった。スナップ留は、作業中にはずれる難があるとのことである。なお、清潔保持の上から洗濯は、2日に1回はする必

要があるようであった。

一般に多く使用されている型としてS病院のもの、また、デザインに工夫をほどこしているものとしてN病院とA病院のものを示すと、第2図のごとくである。



第2図 1956年～1960年の広島市における代表的な看護衣

以上の調査結果から、看護衣の具備すべき条件を考えてみると、基本的には次のような点が挙げられる。

①看護衣は、看護婦という職業の伝統的な矜持を持つものでなければならぬし、国際的、社会的な通念を余りこわすものであってはならない。

②看護衣は、病院が貸与している制服であり、年齢の別なく着用するものである。

③看護婦の勤務は、手術場を除けば、外来と病棟に大別され、さらに各科に分けているけれども、その作業ないし労働の内容には大差なく、中等度の労働であり、看護衣は一応この範囲の機能性をもたなければならぬ。

④看護衣は、病院という職場において着用するものであるため、常に清潔を保持できるものでなければならぬし、感覚的にも、これをこわすものであってはならない。

⑤さらに病院という環境にふさわしく、かつ患者をいたずらに刺戟せず、患者に好感のもたれるもの、心理的好影響を与えるものでなくてはならない。

すなわち、看護婦の通念を破らない、老若の着用可能な軽快なユニホームであり、患者の心理に与える好効果をも考慮し、経済的にも、丈夫で洗濯に耐えるものであることが必要とされるようである。

そしてこの①の条件は、僧衣にも似た歴史的、伝統的な背景をうかがわせるものであって他の多くの働き着が機能本位に自由にデザインできるものとは違った面が、看護衣には含まれている。

しかしながら、これらの条件内で現在の看護衣を検討してみると、被服構成上の機能的な面に対しても、美的感覚面からも、清楚で、シンプルなデザインが要求されるとしても、なお、工

夫の余地があると思われる。

これらの看護衣に関する条件を考慮のうえ、実際に看護衣を改良するためには、具体的、技術的にどのような点が要求されるであろうか、さし当り次の諸点を取り上げてみた。

①ワンピース形式が無難である。これはツーピースに分けると第一、着用するのに手間がかかる。着くずれしやすい。何かと不経済である。

②布地は木綿など。(耐洗濯性に強いもの)

③袖は7分袖または8分袖。(アームホールをゆったりさせる)

④衿はテーラー・カラーが凛凛しく美的でよい。(誰にでも似合う衿として)

⑤ポケットは大き目に。(両側に)

⑥前留は、ボタン留にする。(しかし、多くのボタンを表に出すことは、物にひっかかることがあるので、かくしボタンにする)

⑦各自の採寸により体型にあったものとする。

この各項を基にして検討し、次の条項に沿ってデザインしたものが1956年11月発表の看護衣である。当時は、なお最適の布地が市販されていなかったので白地の木綿かナイロン・タッサ

ーと一応きめた。しかし、白地木綿は、今まで多く使用済みなので、ナイロン・タッサを汚れの落ちやすく、しわになり難い点から取り上げてみた。

デザイン解説

①緊急の場合、着脱ぎの楽なドレス。

かぶって着用することは、裾から頭を通す不潔さもあり、下から着ることは余り楽なことでもないので、前開きで打ち合せを深くしてみた。

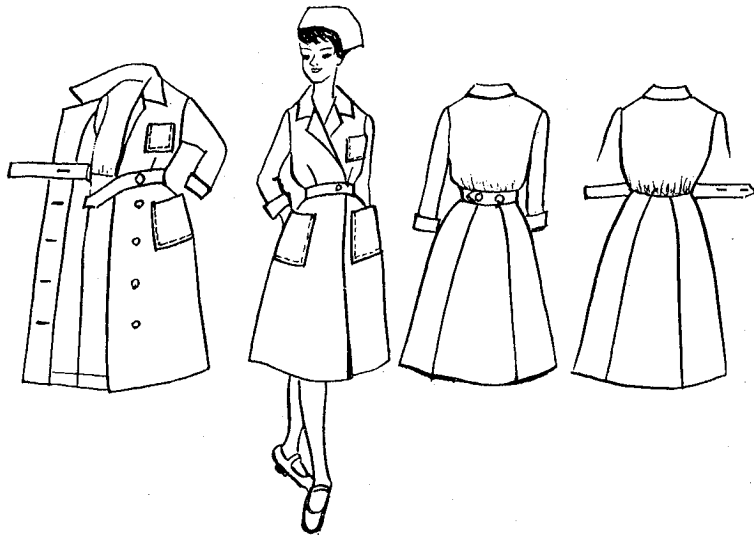
②誰にでも似合う衿としてテーラー・カラーにした。

③身幅、着丈、袖つけに必要な運動量を加える。

④袖丈は長さの調節のできる7分袖で、折り返しカフスつき、袖口は余り広くしない。

⑤ウエストには簡単にしめられるベルトをつける。(ベルトが別だと手間がかかるので、はめ込み式)

⑥前留は、かくしボタンにする。スナップ留は、特殊病院の場合、はずれることも多いとの意見もあり、ボタン留もボタンが物にひっかかる恐れがあるので、かくしボタンにした。これを図に示してみると第3図のごとくである。



第3図 1956年発表の看護衣

備考；下前(左)ベルト先を上前脇の穴へ通し後に廻してボタン止。前ボタンはウエストベルトだけに1個である。下は、かくしボタン。裾回りは180cm、ウエストは、ベルトにより調節ができる。袖丈は、7分で折り返しカフスにより調節する。

留意点

当時(1956年)は白地を使用したけれども、看護衣にも色物を使用してもよいと考えた。白聖の病院で白壁の病室といった一時代前には常識であったことが、白という色の、患者に与える心理的な効果を考慮されるにおよんで、現在では、グレイ系統、薄緑系統など清潔感を保ちながらも患者の気分を和らげる色に、病院色自体が変ってきている。看護衣もこれらとの調和を保ちながら、患者に好効果を与える淡い薄い色が使用されてよいと思われる。たとえば、小児科で働く人たちには小児に親しめる色を考えるなどである。また、布地としては、夏はブロード、冬は化繊の少し厚手の布地がよいと思われた。

1956年11月発表の働き着ショーの場合には、当時の看護衣とデザインした作品とを比較できるように同時に出した結果、機能面、美的な面も一応好評は得たが、普通の洋服を新調するのとは異り、ユニホームは次第に改良されるものと思われる。

III 1960年の調査

調査対象および調査方法

総合病院および、その他各科の病院について、広島市内における16カ所、呉市内における7カ所、計23カ所の病院を調査対象とし、前回と同様の調査を行なった。なお、アンケート調査の対象は、上記各病院に従事する看護婦 593名であった。

調査内容

◦職場の調査

職場環境、看護婦数、平均年齢、食事場所
仕事の種類と内容

◦作業の調査

労働内容、作業状態、労働環境

◦看護衣の調査

給与状態と現在の看護衣についての問題点
(デザイン上、裁断上、縫製上)

アンケートの内容

◦次の項目のうち、よいと思われるものを○印でかこんでください。なお、()内には必要事

項を記入してください。

- 性別 男女 ◦年齢 () 才
- 仕事着 あり なし
- 現在の仕事着(看護衣)の色は何色ですか () 色
- 希望として次の何色がよろしいですか。白、水色、クリーム色、グレイ(灰)、格子縞、縞柄、その他
- 現在の看護衣の地質は何ですか。キャラコ、ブロード、ナイロン、化繊
- 冬はウール地が よい いけない
- 着丈は長い方がよい 短い方がよい
- 袖はあった方がよい。 長袖 短袖 ない方がよい。
- 衿はあった方がよい ない方がよい
- あきは、前開きがよい 後あきがよい あきなしでかぶるのがよい
- あきの仕末は、釦留めがよい チェックがよい
- 着替えは何枚ありますか。 夏()枚、冬()枚 ()枚
- 洗濯は週に何度なさいますか。 1回 2回 3回
- 洗濯はどの方法でなさいますか。 自分でする。 家の人がする。 クリーニングに出す。
- 貴女の仕事着は、布地と仕立代とでどの位かかりましたでしょうか。 500円まで 1,000円まで 1,500円まで その他()
- まとまった一定の仕事着がほしいと思いませんか。 思う 思わない
- ユニホームにおしゃれをしてみたいと思いませんか。 はい いいえ
- 今までのデザインで満足ですか。 満足 不満
- 夏と冬では布地や形を変えた方がよいですか。 同じでよい 変えた方がよい
- 貴女の仕事着の形を簡単に書いてください

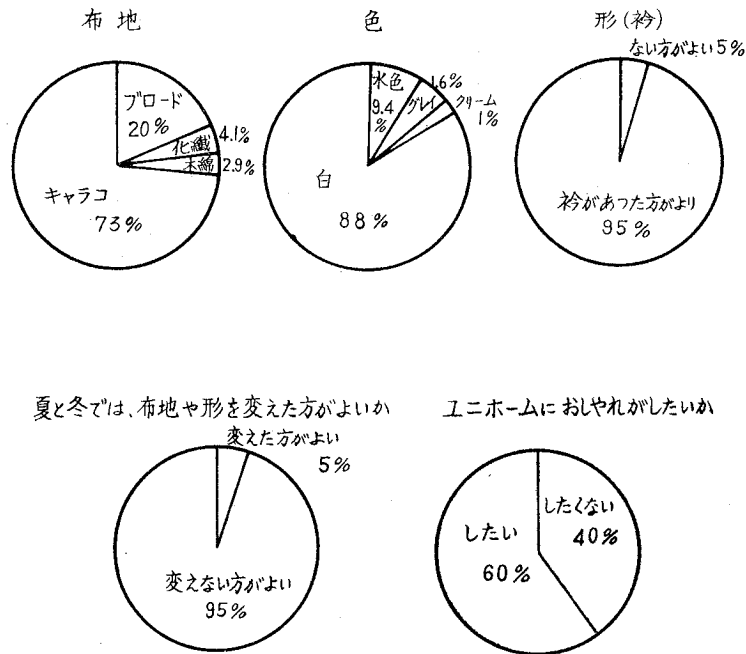
結果および考察

今回の調査に当り、前回と異なる点は余りみら

れないが、物価の上昇にともない幾分か予算額がふえているようである。(800~1,200円)新調に当たってのサイズは、小の寸法を着用するよ

うな体格の人は採用していないので、特大・大・中のものであった。

アンケートの結果を示すと第4図のようであ



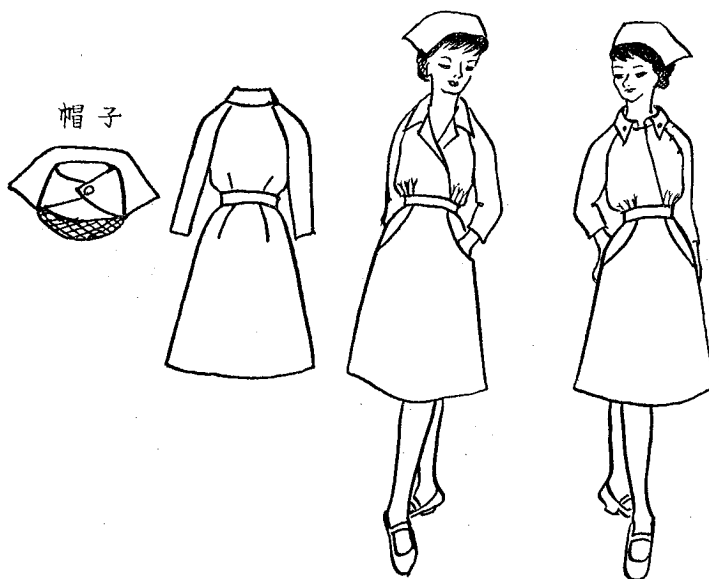
第4図 アンケートの結果

る。すなわち、希望項目のユニホームにおしゃれがしたいか否かに対して、したいのが60%。色は何色がよいかに対して、白が圧倒的。布地は、ブロードよりもキャラコが糊つけ仕上げに適しているせいか、約¾を占めている。形の上では、衿があつた方がよいようである。夏と冬では布地や形をかえた方がよいかに対しては、変えない方がよいが多数だった。

上記の成績に示されているように、若い人たちが、かなり自分たちの着ている被服について関心をもっていることが認められた。しかし、ある若い看護婦が、看護衣の丈が長いので裾に近いところにタックをとり、これにプレスして、

裾に2~3本のラインを作って着用していたところ、婦長から厳しく注意されたというような話もあり、看護衣のデザイン改良には、この辺りの事情も複雑にからんでいるようである。

上記のものを土台として、前述の若い人たちの希望事項も考慮し、さらに機能的なデザインを試みて、1960年に第2回目の看護衣を発表した。このときには、布地としてしわになり難しく、洗濯に耐え、酸・アルカリなど、耐薬品性も比較的優れているブロード(テロン65%、木綿35%)の布地を選び、色は淡いブルーのものを使用し、次の条項に沿ってデザインした。



第 5 図 1960 年発表の看護衣

備考：帽子は看護衣と共布で作り、後髪をネットの中にまとめる。衿を開いて、テーラー・カラーで着用することも可能である。

デザイン解説

①衿 テーラー・カラーにもなるようにした小さめのソフト・カラー。(テーラー・カラーを用いたのは、年齢を問わず誰にでも向く衿であるためである)

②前打ち合せ 落着きよく美しく斜めの線を生かし打ち合わせる。

③袖 ラグラン・スリーブを試み、袖つけの運動量を出す。

④袖丈 7分にして、袖口は余り広くしないようにし、折り上げて短かめの袖丈にしても着用し得るようにした。

⑤ポケット 胸の位置のものは、ラグラン・スリーブの切替線を左側のみ利用。脇ポケットは、切替えてポケット口を作り、脇あきもこのポケット口線を利用。

⑥ベルト 別に作り、ウエストをしめる。

⑦帽子 後髪をネットの中にまとめる。

このデザインは、第5図のようである。

留意点

この回は、すでに適当と思われる色の布地も

出廻っていたし、東洋レーヨンKKから資料の提供もうけていたので、早速、前回からの懸案になっていた、純白でない看護衣を作製した。出来上がったものは、決してきざっぽいものではなく、柔かい温味のある感じの中に、清潔感を失わない好感のもてるものであった。このような淡い薄い色物であれば、落着きのある色調のブルー系統、薄緑系統、グレイ系統などは十分使用し得るものと期待される。

これは、ただ、院内一色系としてではなく、内科系の人たちは薄緑色に、外科系の人たちは淡いブルー、あるいは薄いグレイといったように使いわけをするならば、各科向きのものとなるばかりでなく、院内全体に変化のある和らいだ雰囲気を作る上に、さらに役立つであろうと思われる。色彩に関する諸科学ならびに技術、すなわち、染料・染色技術、色彩と心理の問題などが進んできている今日においては、かなりデリケートな色の選択もできるし、水洗いにも十分耐えるという要求にも応じられると思われるので、好ましい色調の看護衣の実現は不可能

でないと思われるのである。

IV 1966年の調査

調査対象および調査方法

広島市を中心とする総合病院4カ所。東京都内のN病院とS病院、以上の病院の看護婦長より聴取した。

調査内容

。広島市内では、前回2回にわたる調査項目およびその後の看護衣について

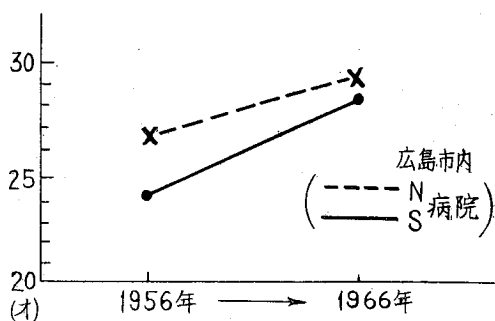
。東京N病院では現在の看護衣と歴史的なものを見学ならびに聴取した。

。S病院では、色物の看護衣について聴取。

結果および考察

看護婦の平均年齢を示すと、第6図のようである。すなわち、1956年では、N病院26.9才、S病院24.0才、1966年では、N病院29.2才、S病院28.6才のごとく、最近では今までに結婚などでやめていた人たちの復職や、永く勤務する人が多くなったせいも、一般に上昇しているようである。

現在、一般に着用されている看護衣のデザインは、著者が第1回目に発表したもの、すなわち、袖丈7分を長くも短くもできるようにカフ



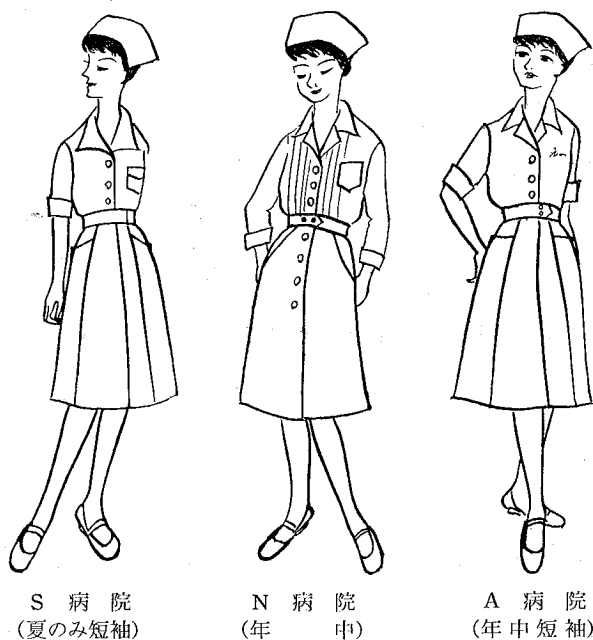
第6図 看護婦の平均年齢

スをつけており、前開きは、かくしボタンとなっている。または、第2回目の発表にあったように、ポケットは斜めの口線で手を入れやすくしているなどのごとく、よい点が相当取り入れられており、次第に改良されるに至っている。少しでも看護衣を着用する人たちの要望が取り入れられてきたことは嬉しい限りである。(第7図参照)

なお、S、N、A病院の看護衣は、それぞれ異っている例として、最初にも述べたように、現在でもその特色を生かしている。

。アイロンかけも楽だというS病院の衿。

。N病院では胸元にピンタックをとって変化を



第7図 1966年現在の広島市における看護衣

つけている。

・冷暖房完備のA病院では年中短袖。

看護衣に対しての考え方の変った点では、現在膝上20cmという極端な一部の流行も、少しは一般にも影響があるように、若い看護婦間には、床上30cmの看護衣の規定すら、よそ目にスカート丈を短くする傾向があつて、自分を美しく飾りユニホームを楽しく着用しているようである。これには余りきびしくいわれないのが現状のようである。

そこで現在に至って広島における色物使用に対しては、余り関心がないようであるため、東京に行って調べた結果、1カ所、色物を使用している病院があつたが、前回から考察されてきたような看護婦の制服としての原則を守り得るような色相、明度、彩度を保つものではなく、ただ最近、院長のお好みで色物を使用したのだということであつた。

実際に調査に当たってみて、一見小さな一仕事着の中にも衣服の歴史的、社会的な背景、その他の多くの問題が宿されており、われわれの立場からのみでは解決困難な、経済事情、その他の壁のあることも知つたのである。

V 総括

現在の看護衣に対しては、まず、第一に採寸をして、各人の体型に合った衣をまとうことから始められるべきであろう。採寸することは、機能的な衣服の第一条件だからである。

看護衣は比較的機能的なものではあつたけれ

ども、構造上、なお、改良の余地があると考えられるし、独特の色彩に関する問題が残っている。私は第二回目に発表したように、ある種の色調の物は使用し得ると考えている。なお、今後の問題点として、色物の看護衣に対する諸調査、ならびに人間工学見地より、機能的デザインを生み出すことに努力したい。

改めて働き着の研究の意義を感ずるとともに興味ある問題と考えるのである。

本論文の要旨は、さる10月大阪市立大で開催された第18回日本家政学会総会において発表した。

本研究において、第一回、第二回の調査段階では海見先生のご好意を感謝するとともに、広島市内ならびに呉市内の病院の看護婦長、看護婦の方方、広島洋裁の卒業生および本学学生のたいなるご協力を得たことを感謝します。

なお、歴史的資料は、東京日赤中央女子短大にて見学したものであつて、重ねて感謝の意を表します。

〔参 考 文 献〕

- 1) 日赤中央女子短期大学編 看護教育6巻3号
昭和40年3月1日発行 医学書院
- 2) 村上信彦著 服装の歴史3
昭和34年9月発行 光生館

Clothing Design for Nurse Uniforms.

Fusako Takahashi

Abstract

The purpose of this study is to find the functional design for the working clothes of hospital nurses, that is, nurse-uniforms to be worn in their working hours, based on my researches made in 1956, 1960, and 1966.

I staged a working people's clothes show in 1956 and 1960.

In 1966, I investigated the history and the recent shifting of hospital nurse uniforms.

At the first show I was thinking of using light-colored cloth, for the material but, being unable to find suitable cloth, I used white one. At the second show, however, I used colored cloth offered by the Toyo-rayon Company Ltd. There is no reason why nurse-uniforms must be white; colored ones will do just as well. I presume that light-colored uniforms, say different colors for different departments, will come about sooner or later, taking into account the harmony with the modern building, favorable influence on the patient, and the synthetic beauty of the environment.